

上演 12

2024年8月2日2校目
関東ブロック

東京都立千早高等学校

「ちんぷんかんぷんぷん」

第48回全国高等学校総合文化祭
第70回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

福井県立藤島高等学校

山本和香

この作品には女子高生のあるあるが多く詰められていた。悩みや疑問に共感しながら思わず笑ってしまう日常を描いていた。

しかし、私たち観客は本当に笑って良かったのだろうか。どこかで彼女たちを他人事だと思っているのではないかと気付かされた。彼女たちにとっての日常は決して楽しいものばかりではないはずだ。例として、劇中で一人の女子高生が実の兄に性的被害を受けたと告白する場面がある。初めは多くの観客がその場で笑っていたが、段々と笑えなくなっていく、しまいには会場が静まりかえってしまった。高校生は色々な不安や悩みに追いかけられながら生きている。実際、同じ悩みを抱える登場人物に共感して涙を流す講評委員もいた。笑ってしまったことによって自分たちが他人事として見ていることに気付き、それではいけないのだと当事者になったつもりで考えなければいけないという意識が高まった。

場面転換でマイムマイムの楽曲が使われていたが、回数を重ねていくほどテンポが速くなっていった。それは色々な悩みの多さや大きさについていけなくなってしまっていることを表していたのではないだろうか。最後に椅子を舞台中央に集めて手を繋いでマイムマイムを踊るシーンでは、椅子だけに光が当たっていて、まるでキャンプファイヤーを取り囲んでいるように見えた。このラストには多くの意見があがった。速すぎる彼女たちの焦燥感や、純粋に高校生活を謳歌している充実感と楽しさで脳がパンクしそうになっている。陰で踊り狂っているのは、大衆が知らない悩みにもがいているから。複雑な気持ちの交錯にちんぷんかんぷんになっている高校生たちの様子を抽象化しているのではないかと、など多くの視点を私たちにもたらしてくれた。

自分たちの話をするにはかなりリスクがあるはずだが、大勢の前でそれをぶちまける姿に心がスッと軽くなった。しかし、不安や悩みを笑いに変えている彼女たちは、本当は弱くて苦しくて仕方がないのに社会で生き残るためにわざと強く見せているのかもしれないとも考えた。言いたくても言えないけど、言わなければ伝わらない。私たちのモヤモヤを代弁してくれた作品だった。そしてただのコント集ではなく人を笑うことの意味、そして笑ってしまった自分達の当事者意識の低さに気付かされた作品だった。

